博　士　論　文（要約）

ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界

――クニッゲ、レッシング、ヘルダーを中心にして――

笠　原　賢　介

本論考の主題は、十八世紀ドイツの著作家が非ヨーロッパとの接触を通してそれをどのように省察し、作品化し、いかなる視点を提示したのか。また、その背景には、ヨーロッパ、非ヨーロッパを含む世界へのどのような態度や把握があるのかを明らかにすることである。

レッシング（1729〜81 年）を中心に据え、啓蒙の著作家として 1960 年代以降注目されるようになったクニッゲ（1752〜96 年）、啓蒙の批判者とされるヘルダー（1744〜1803 年）を前後に配し、レッシングに結実した非ヨーロッパ世界の把握が同時代のどのような脈絡のなかにあるのかが示される。

十八世紀は啓蒙（Aufklärung, Les lumières, Enlightenment）の世紀と言われる。啓蒙はしばしば、科学技術や技術的合理性を手放しで礼賛した思想潮流と解され、指弾される。だが、ドイツにおいては 1960 年代以降このような理解は見なおされ、新たな見方が様々な形で提示されるに至った。ヘルダーに関しても、ドイツを超えた汎ヨーロッパ的な啓蒙の諸潮流を養分とし、それらとの対話のなかで思想を展開したことが解明されてきている。

本論考は、これらの成果をふまえながら、そこに新たな寄与を付け加えようと試みるものである。1960 年代以降の見なおしは、啓蒙を現代ヨーロッパの原点と捉えた上での再評価や発掘が中心であり、非ヨーロッパ世界把握の問題は十分に検討されていないからである。

全体は序論と本論三章、結語からなる。序論では本論考の主題が研究史のなかで位置付けられ、論述全体の構成が示される。本論三章の内、第 2 章ではレッシングの非ヨーロッパ把握、第 3 章では人類の文化の多様性を肯定するヘルダーの思想が考察される。第 1 章ではクニッゲを中心にして、レッシング、ヘルダーの背景をなすドイツ啓蒙の特質が明らかにされる。

第 1 章においてはドイツ啓蒙の特質が〈社交性（sociabilitas, socialitas, Geselligkeit）〉という角度から考察される。〈社交性〉は、1960 年代以降の啓蒙の見直しのなかで提示された論点である。本章の考察はこれを引き継ぎ、そこに新たな寄与を付け加えようとするものである。

ドイツにおいて〈社交性〉は、トマージウス（1655〜1728 年）においてフランス宮廷を模範として強調され始めるが、十八世紀後半には宮廷文化への批判が前面に出てくる。だがこの批判は〈社交性〉の否定ではなく、宮廷とは異なった自由な交わりの希求と一体のものであった。この点をクニッゲの主著『人間交際術』（1788 年）を中心にして明らかにし、

カント（1724〜1804 年）とレッシングが問題を共有していることが示される（ヘルダーについては第 3 章で述べられる）。

第 1 章の考察は、第 2 章、第 3 章の主題であるレッシングとヘルダーの背景にある啓蒙の脈絡を明らかにしようとするものである。〈社交性〉は、人間が自閉的な存在ではなく、交流を求める性格を持つことを意味する。レッシングやヘルダーにおける非ヨーロッパへの開かれた思考と感性は、単なる異国趣味ではなく、啓蒙において浮上した〈社交性〉の主題を世界大に拡大したところに成立していると見ることができるのである。

第 2 章ではレッシング初期の作品『カルダーヌス弁護』（1754 年）が、そこに登場するイスラームを中心にして考察される。ユダヤ教、キリスト教、イスラームの問題は晩年の『賢者ナータン』（1779 年）において作品化されている。また、本論考の見るところでは、そこには、それらのいずれにも属さない偶像崇拝に分類される諸宗教の問題が含まれている。だが、これらの問題はレッシングの生涯を貫くものであり、初期の『カルダーヌス弁護』に萌芽が見られる。本章は、当作品の考察を通して『賢者ナータン』への道筋を照らし出そうとするものである。

『カルダーヌス弁護』は通常は論文に分類される。だが、読解を求める多義的な作品として構成されているとするのが、本論考の視角である。『カルダーヌス弁護』をそのような作品として捉える鍵は、ピエール・ベール（1647〜1706 年）の『歴史批評辞典』（1696 年初版）にある。考察に当たっては、ゴットシェート（1700〜1766 年）による独訳『歴史批評辞典』（1741〜44 年）に着目する。

『カルダーヌス弁護』はユダヤ教徒とイスラーム教徒の弁論によって論述が中断される特異な論文である。イスラーム教徒の弁論の考察を通して、レッシングがイスラーム認識の進展を踏まえ、イスラームを偽宗教とする『歴史批評辞典』に見られる伝統的なイスラーム観を転換していること、だが、ベールとの関係は単純な否定ではなく、ベールの寛容思想を引き継いでいることが明らかにされる。ユダヤ教徒の弁論に関しては、『ヨブ記』との関わりが考察される。

『カルダーヌス弁護』は『歴史批評辞典』「カルダーノ」の項への「補足」として始まるが、イスラーム教徒の弁論は『歴史批評辞典』「マホメット」の項への「補足」となっている。論述は二つの弁論によって中断され、論述そのものも展開の過程で論述の軸となる語の意味がずれ、多義的な意味の場が形成されている。この点に着目して、注釈に注釈を重ね時に真意の所在が不明になる『歴史批評辞典』の文体が『カルダーヌス弁護』に創造的

に作用した可能性が指摘される。弁論の登場に関しては『ヨブ記』との連関が指摘される。

レッシングが『カルダーヌス弁護』において独訳して論じているカルダーノ（1501～1576年）の著作『精妙さについて』（1550 年）のなかの宗教比較の箇所には偶像崇拝者が登場するにもかかわらず、レッシングの本文には偶像崇拝者が登場しない。本文の考察を通して、偶像崇拝者の登場が意識的に避けられていることが明らかにされる。偶像崇拝者の不在は、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教の地域にかつて存在していた偶像崇拝者の抹殺の問題を提起するものであることが示される。

以上を踏まえて『賢者ナータン』に至る道筋が辿られる。考察に当たっては、この作品と『カルダーヌス弁護』の間の時期に書かれた『アダム・ノイザー』（1774 年）に注意が払われる。そこにおける、人は対立する宗教やヨーロッパと非ヨーロッパの境界をも越えて移動し、交わるというモチーフが、『カルダーヌス弁護』における宗教の複数性、多声性の問題と編み合わされて、オリエントの〈聖地〉エルサレムの争奪を核とする錯綜した人間関係が織りなす劇『賢者ナータン』に結実していることが示される。登場人物の一人であるイスラームの托鉢僧アル・ハーフィの考察を通して、『カルダーヌス弁護』において声の不在という形で示された〈異教徒〉の問題が、『賢者ナータン』に引き継がれていることが示される。

レッシングにおいては、イスラームのみならず、一神教的空間の外に広がる〈異教徒〉の領域が視野に収められ、非ヨーロッパの声（またその不在）が造形され、ヨーロッパのなかの非ヨーロッパとも言うべきユダヤ教の声と交錯しながら、作品として提示されている。ヨーロッパ啓蒙の〈社交性〉の場にその内と外からの別の声が登場するのである。

第 3 章ではヘルダーの主著『人類歴史哲学考』（以下、『イデーン』）（1784～91 年）が考察される。非ヨーロッパへの視点、それと連関するヨーロッパへの省察、両者を支える基本視点を取り出すことが主題である。これらを通して、ヘルダーとレッシング、啓蒙との間の連続性が示される。

『イデーン』の基本視点として「地球」と「変容（Metamorphose）」が取り出され、これらの視点に基づくヨーロッパ中心主義批判が考察される。そこにおいては「幸福」や「文化」のみならず「啓蒙」に関してもヨーロッパからの脱中心化が行なわれ、多様性が承認されている。だがそれは、規範なき相対主義ではなく、「啓蒙」と「文化」は、生を破壊する側面をも持つ明暗両様のものとして捉えられていることが示される。

これを踏まえて、このような視点の背景がベールとゲーテ（1749～1832 年）を手がかり

にして考察され、『イデーン』のヨーロッパ論が取り上げられる。ヨーロッパ中心主義を批判しながらも、『イデーン』に示された視点は、ヨーロッパに生きる者の省察として、結尾をなす第Ⅳ部のヨーロッパ論に接合されている。ヘルダーは、ヨーロッパの形成史を振り返り、ヨーロッパの形成にキリスト教が果たした役割を評価しつつも、十字軍を含め中世から近世にかけてのキリスト教の歴史を批判する。この点の考察を通して、人類の足跡を明暗両様のものと見るヘルダーの視点がヨーロッパを例外とせず、ヨーロッパに向けられていることが示される。

ヘルダーは、ヨーロッパの形成に当たってイスラーム圏が果たした役割を重視し、学問とともに文学に与えた影響を強調する。イスラーム圏の詩がヨーロッパに波及し、「近代ヨーロッパ文学の母」たるプロヴァンス語文学の成立を促したとする。この点が、ヘルダーが参照したアラビア文学とスペイン文学に関する同時代の著作を手がかりに考察される。

以上を踏まえて、諸地域を交流の相のもとで見る『イデーン』の視点の根底にあるものが、初期の『自然と恩寵に関するライプニッツの原則について』(1769 年) に遡って考察される。これを通して、第 1 章で確認した、人間を、交流を求める〈社交的〉な存在と捉えるドイツ啓蒙の見方をヘルダーが共有していることが確認される。

最後に、啓蒙、カント、レッシングと『イデーン』との関係がまとめられる。

『イデーン』の背景には、ニュートン (1642〜1727 年) らによる自然認識の変革、歴史に対するヴォルテール (1694〜1778 年) とベールの見方、存在の多様性を肯定するライプニッツ (1646〜1716 年) の思想があることが整理され、啓蒙の哲学者カントによる『イデーン』批判が、『純粋理性批判』(1781 年) によって批判哲学を確立したカントとそれ以前の啓蒙を養分としながら独自の思想を展開したヘルダーの間の対立と捉え得ることが確認される。カントとヘルダーの間には、カントによる曲解があること、両者の対立にもかかわらず、架橋の可能性があることが示される。レッシングに関しては『ハンブルク演劇論』(1767〜69 年) に着目して、『イデーン』が啓蒙の標語である〈思考の自主性 (Selbstdenken)〉の思想を継承していることが示され、啓蒙との連続性が確認される。『イデーン』はまた、レッシング晩年の断片『キリストの宗教』(1780 年成立、1784 年公刊) を引き継ぎ、パレスチナの地に生きたイエスとヨーロッパのキリスト教の歴史を区別し、後者に批判の目を向ける。これによって、ヨーロッパを尺度とせず、地球上に展開する人類の活動を対等に見る視点が切り開かれていることが示される。

結語では論点の相互関係が整理され、含意が解きほぐされる。それに基づいて展望とま

とめが述べられる。

最後に、本論考の各章・節・小節の表題を示しておく。

第 1 章　クニッゲと啓蒙の社交性――カント、シュライアーマッハー、レッシングとの連関のなかで――

1. 序
2. 社交の世紀としての十八世紀
3. カントにおける啓蒙と社交性
4. クニッゲと『人間交際術』
   (1) クニッゲの生涯
   (2)『人間交際術』――その構想
   (3)〈振舞いの文学〉
   (4) 交際に対する両義性――クニッゲとルソー
5. 初期ロマン派との連続と不連続――シュライアーマッハーとクニッゲ、カントとの間
6. むすび――レッシングと社交性

第 2 章　レッシングと非ヨーロッパ世界――『カルダーヌス弁護』におけるイスラームをめぐって――

1. 序
2. ジロラモ・カルダーノ
3. ピエール・ベール
   (1)『歴史批評辞典』と十八世紀ドイツ
   (2) ベールとレッシング
4. イスラーム教徒の弁論
5.「真理」「虚言」「理性」の多義性
6.「迷宮」としての『カルダーヌス弁護』
7.〈異教徒〉の不在と最終判断の欠如
8. むすび――「ここにも神々はいるのだから、遠慮なく入るがよい」

第 3 章　ヘルダー『イデーン』における非ヨーロッパとヨーロッパ

1. 序

2.『イデーン』の基本視点――「地球」と「変容（メタモルフォーゼ）」

3. ヨーロッパ中心主義への批判

4. 歴史への二重の視点の背景――ベールとゲーテ

5.『イデーン』のヨーロッパ論

6. 窓のあるモナド

7. むすび――ヘルダーと啓蒙、カント、レッシング